不登校への類似性認知と行動

宮本正一・児玉　岳

（岐阜大学教育学部・大垣北小学校）

キーワード: 不登校　類似性　共感

Effects of the similarity to non-attendant persons on the empathy

Masakazu Miyamoto (Gifu University)
Gaku Kodama (Oogaki-kita elementary school)

Key words: non-attendance, similarity, empathy

不登校への対応を考えるとき，周囲の者の共感的態度が重要である。この共感的態度が現れる要因として相手との類似性認知が考えられる。本研究はビデオの登場人物に対する類似性認知の好意度，態度への効果を実験的に検証する。

文部科学省による平成22年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」によると，30日以上学校を欠席した小中学校の不登校児童生徒数は114,971人であった。これは小学生の0.32%，中学生の2.74%にあたる。さらに，「指導の結果登校する又はできるようになった児童生徒」に特に効果があった学校の措置として「登校を促すため，電話をかけたり迎えに行くなどした(10.6%)」「家庭訪問を行い，学業や生活面での相談に乗るなど様々な指導・援助を行った (10.8%)」という働きかけが挙げられている。

小林・下村 (2001) は中学校時代に不登校を経験した者の自己概念の変容を研究するなかで，①重回帰分析の結果，「教師との学外での交流」が「登校行動」の規定要因であること，②「友人との学外での交流」が「自己親近感・自己肯定感」の上昇と関連があることを示している。つまり，学外で友人や教師との交流の機会を多く持てば持つほど，友人から肯定的なフィードバックを得る機会も多くなり，「自己親近感・自己肯定感」の上昇に効果的に作用したと考えられる。

不登校に接する周囲の人々の対応において，不登校児童生徒への認知が重要であり，個別に対応する際のラポールの形成，親との協力関係の構築に影響すると考えられる。白井 (1992) は30歳未満の青年538人，30歳以上の大人360人，教師170人を対象に，不登校へのイメージ調査をしている。その結果，「自分勝手な」等の否定的な評価イメージと，「充実した」等の不登校を自己実現の過程にある者として肯定的に意味づける共感的イメージとに集約された。教師は否定的イメージ得点が 3 群の中で一番低かったが「ややあてはまる (4)」と「どちらともいえない (3)」の中間 (m=3.12) であった。共感的イメージ得点は 3 群の中で一番高得点であったが「ややあてはまらない (2)」に近かった (m=2.02)。さらに青年，特に男子青年は不登校に対して否定的イメージが強く，共感的イメージが弱かった。不登校児童生徒との接触度を要因に組み込んで分析してもあまり大きな違いは得られなかった。

丸山・竹田 (2011) は不登校への支援経験の差が不登校原因イメージへの影響，支援方略への影響を検討している。その結果，不登校への支援経験があればあるほど「学校に行っていない」という問題を直接的に解決しようとするだけではなく，その背景にある諸問題にも目を向けていることが示唆された。

不登校への働きかけが支援に効果的であると言われながら周囲の人々が不登校に対して抱くイメージは否定的で非共感的なものであった。一体，どのような要因が不登校への共感的態度を形成するのであろうか。

社会心理学の対人魅力研究には，Byrne

(1971) と彼の共同研究者による類似性魅力理論がある。ここでは他者による回答結果だとされた質問紙結果を被験者に配布し，その回答者への好意度を尋ねた。ここで配布された質問紙結果はまったく架空のものであった。その結果，配布された回答者の態度が自分自身の態度と類似していればいるほどその回答者に対して好意的な評価を下していた。この理論は，類似性を一種の報酬と考える。人は自分の考えや行動がどれだけ妥当であるかを判定するために，他者との社会的比較を行っている。自分と類似しているということは，共通のものをもっていることであり，それは自分の考えや認知，行動が正しいことを知らせてくれることになる。すると自己評価を維持し，補強することにもなるので心理的「快」の報酬価をもっていると考えるのである。さらに類似している他者の考えや行動は予測しやすく，理解するのにも心理的コストが少なくてすむことも報酬になるのである。類似性認知と対人魅力との関係はその後，多くの研究により支持されている (中村, 1984; 中里・井上・田中, 1975; Palmer & Byrne, 1970; Stalling, 1970)。

中学生の時期は思春期に当たり，身体の発育はめざましく，自分自身への関心が増大する。他方で友達との関係に非常に敏感になる時期である。五十嵐 (2011) は小中学生の一年間にわたる不登校傾向の変化とソーシャルサポートとの関連を検討する中で，友人からのサポート量は不登校傾向に負の影響を与えていることを示している。

櫻井 (2011) は不登校の周辺要因である，周囲の子ども達が不登校に対してどのような評価をしているか報告している。その結果，不登校評価として「配慮・共感」「批判・羨望」「疑問」「無関心」の４因子を抽出している。これは本間 (2000) の「配慮・共感」「批判」「羨望」「無関心」の４因子とほぼ類似していた。ここで問題となるのは不登校に対する評価や感情がどこからどのように形成されてくるかという問題である。

そこで本研究は不登校生徒に接する可能性の高い周囲の者として中学生を取り上げ，不登校生と類似性を認知する者はそうでない者よりも不登校生徒への好意度が高く，共感的態度も強いのではないかと仮説した。つまり，①同じ中学生として不登校の中学生をどのように認知しているかを検討する。さらに，②白井 (1992) の質問紙調査では「登校拒否児」へのイメージを調査しているが本研究では「不登校」生徒へのイメージを取り上げる，③一般的な「登校拒否児」へのイメージを問題にするのではなく，具体的な「不登校」人物を取り上げて検討する。

方　法

研究対象者　岐阜県内のＡ中学校２・３年生の生徒，計８学級の245名，及びその校区内にある適応指導教室の生徒7名，合わせて252名である。

刺激ビデオ　本研究では具体的な「不登校」人物を取り上げて検討するため，登場人物の異なる，視聴時間約３分のビデオを２種類使用した。ビデオ１での不登校生の内容とは，優等生だった男子 (現在22歳)　が部活動の野球でつまずいて不登校になっていった様子をナレーションと本人が語っていく内容である。ビデオ２での不登校生の内容とはいじめが原因で身体反応が現れ，不登校になっていった男子 (現在20歳) の様子をナレーションと本人が語っていく内容である。

類似性認知尺度　「性格」「雰囲気」「考え方」「印象」「なんとなく」の５項目に対して「似ている，どちらかといえば似ている，どちらかといえば似ていない，似ていない」の４件法で回答を求めた。

イメージ　白井（1992）で使用された登校拒否児に対するイメージ尺度から形容詞を一部利用し，SD方式に変更して使用した。回答形式は意味が対になる形容詞からなる15対に対して，「非常によくあてはまる，よくあてはまる，どちらかといえばあてはまる」の３項目を対にした６件法で回答を求めた。ポジティブな形容詞（例：明るい）に「非常によくあてはまる」としたものを６点，ネガティブな形容詞（例：暗い）に「非常によくあてはまる」としたものを１点とする尺度得点とした。この尺度得点は点数が

高いほどビデオに登場した不登校の人物に対して好意的であるといえるので，好意度得点と名付けることとする。

不登校との関与度　「あなたの身近に不登校や保健室登校，相談室登校の人はいますか」と教示し，「身近にいない (1)，クラス・学校にいるorいた (2)，友人にいるorいた (3)，自分自身を含め家族にいるorいた (4)」から回答を求めた。

手続き　中学校２・３年生の学級担任の先生を中心に協力を願い，各学級で調査用紙を配り，中学校の放送室から放送で注意事項などを読み上げた。そして各教室でビデオを再生したのち，登場人物に対するイメージを生徒一人ひとりに回答してもらった。調査終了後に質問紙は学級ごとにまとめて回収してもらった。適応指導教室では，個々の生徒に質問紙を配付し，注意事項を読み上げたのち，ビデオを再生した。その後回答を求めた。どちらの調査も実施時間はおよそ20分であった。

結　果

類似性認知尺度は，似ている (4)，どちらかといえば似ている (3)，どちらかといえば似ていない (2)，似ていない (1) と得点化し，５項目の合計を求めた。したがって得点範囲は５-20点になる。図１と図２に類似性認知得点のヒストグラムを示した。研究対象者の59%が５項目全てにおいて，自分に似ていない (得点５) と回答していたので類似度低群，残りを高群とする。

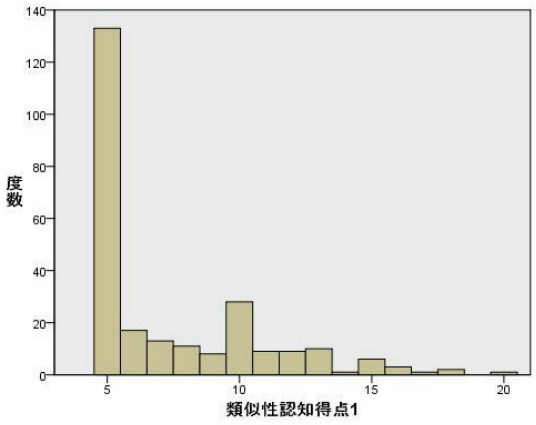

図１　類似性認知得点のヒストグラム（ビデオ１）

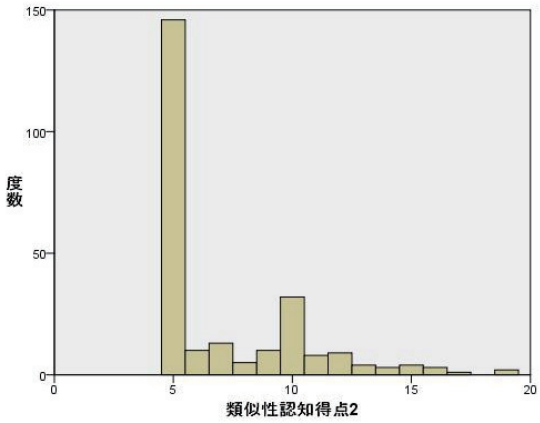

図２　類似性認知得点のヒストグラム（ビデオ２）

イメージ尺度はビデオ毎に因子分析を行い，どちらも1因子解が得られた。ビデオ１は11項目(明るい－暗い，良い－悪い，強い－弱い，さびしい－にぎやかな，優れている－劣っている，自立的な－依存的な，無気力な－意欲的な，やわらかい－かたい，安定した－不安定な，幸福な－不幸な，豊かな－貧しい)，ビデオ２は14項目の平均項目得点を登場人物への「好意度得点」と呼ぶことにする。

まず性差を検討したが，いずれの指標においても性差は得られなかったので，男女を区別せずに分析をした。

ビデオ１について (図３)，登場人物への好意度得点を類似度２群で比較し，等分散を仮定しないｔ検定を行った。類似度高群 (n=89, m=2.89) は類似度低群 (n=163, m=2.53) より高得点であった (t[226.5]=4.382, p<.0001)。しかし効果量（r）は.28となり，小さな値であった。

類似度高群だけを抽出し，類似度得点と好意度得点との相関を求めたところ r=.298, n=89, p<.004 となり，弱い正の相関があった。

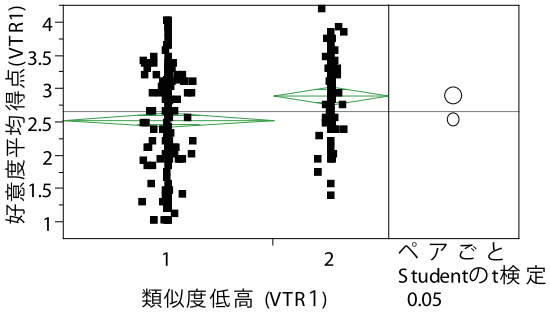

図３　類似度低高群毎の好意度（ビデオ１）

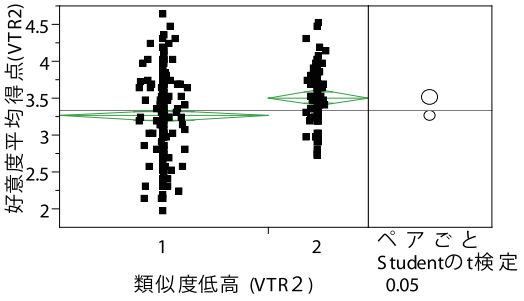

図４　類似度低高群毎の好意度（ビデオ２）

ビデオ２について（図４），好意度得点を類似度２群で比較し，等分散を仮定しないt検定を行った。類似度高群（n=81，m=3.51）は類似度低群（n=169，m=3.26）より高得点であった（t[219.6]=4.05，p<.001）。しかし効果量（r）は.27となり，小さな値であった。

類似度高群だけを抽出し，類似度得点と好意度得点との相関を求めたところr=-.246，n=81，p<.027 となり，弱い負の相関があった。つまりビデオ２では不登校への類似性が強く認知されれば好意度が逆に低下する傾向にあった。

表１　類似性認知４群の好意度得点（ビデオ１）

（　）内は人数

		類似性認知（ビデオ２）	
		低	高
類似性認知（ビデオ１）	低	2.53 (146)	2.59 (15)
	高	2.75 (23)	2.93 (66)

表２　類似性認知４群の好意度得点（ビデオ２）

（　）内は人数

		類似性認知（ビデオ２）	
		低	高
類似性認知（ビデオ１）	低	3.25 (146)	3.66 (15)
	高	3.32 (23)	3.47 (66)

２種類のビデオに対する類似性認知の組み合わせにより，４群を作成した（表１と表２）。ビデオ１とビデオ２の関連係数はϕ=0.663，オッズ比=27.93であり，ある程度の関連性が見られた。

表１の４つの群から適応指導教室通級群（n=7）を取り出して第５番目の群として，群を独立変数，ビデオ１での好意度得点を従属変数とした分散分析の結果は有意であった（F[4/245]=5.896，p<.001）。ただし効果量はη^2=.01と効果はなかった。図５に示すように，適応指導教室通級群は一番好意度得点が高く，下位検定の結果，ビデオ１と２の両方で類似性を認知しない第1群は，適応指導教室通級群と２つのビデオとも類似性を認知した第４群よりも好意度得点が有意に低く，仮説を支持する結果であった。

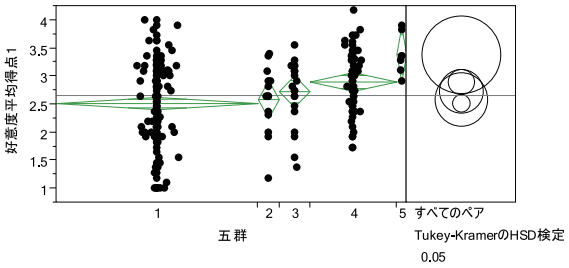

図５　類似性認知の５群毎の好意度得点（ビデオ１）

表２の４つの群から適応指導教室通級群（n=7）を取り出して第５番目の群として，群を独立変数，ビデオ２での好意度得点を従属変数とした分散分析の結果は有意であった（F[4/245]=4.169，p<.003）。ただし効果量はη^2=.01と効果はなかった。図６に示すように，下位検定の結果，ビデオ１と２の両方で類似性を認知しない第１群は，２つのビデオとも類似性を認知した第４群よりも好意度得点が低く，仮説を支持する結果であった。ただし第２群は一番好意度得点が高かった。適応指導教室通級群の得点は高くはなかった。

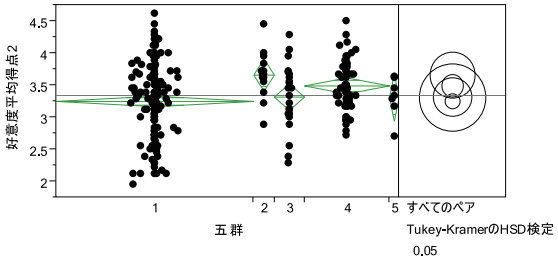

図６　類似性認知の５群毎の好意度得点（ビデオ２）

表３　不登校との関与度と類似度認知（ビデオ１）

		不登校との関与度			
		身近にはいない	クラス，学校にいる，またはいた	友人にいる，またはいた	自分自身を含め家族にいる，またはいた
類似性認知	低	15	118	12	10
	高	10	56	13	5

表４　不登校との関与度と類似度認知（ビデオ２）

		不登校との関与度			
		身近にはいない	クラス，学校にいる，またはいた	友人にいる，またはいた	自分自身を含め家族にいる，またはいた
類似性認知	低	16	124	11	10
	高	9	49	14	4

不登校との関与度と類似度低高群とのクロス集計を表３と表４に示した。関与度を順序尺度と見なしてMann-Whitney U testを実施した。ビデオ１，ビデオ２とも有意ではなかった。しかし表４のビデオ２ではχ二乗検定の結果が有意（$\chi^2[3]=8.20$, $p<.042$）であった。類似度高群には「友人に不登校がいるorいた」と答える傾向が高かった。

さらに人数は少ないが，適応指導教室通級生徒を区別して分析を行った。好意度得点と類似度得点に関して，ビデオ１と２との違い（A要因），中２，中３，適応指導教室通級群の３群（B要因）で二要因分散分析を行った。

図７に，類似性認知得点の平均を示した。適応指導教室通級群（n=7）は中２，中３の２群よりも明らかに自分との類似性を認知していた（$F[2/249]=12.82$, $p<.01$）。質問に正直に回答していたと判断される。LSD法による下位検定でも有意であった。

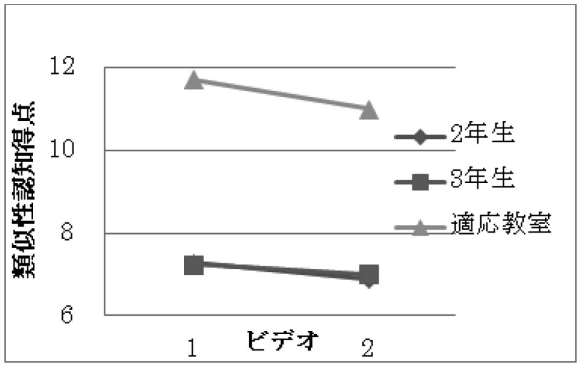

図７　類似性認知得点

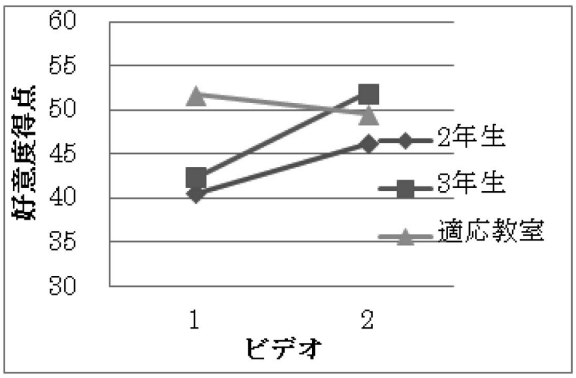

図８　好意度得点

図８に好意度得点の平均を示した。ビデオと群の交互作用が有意（$F[2/249]=3.63$, $p<.05$）となった。そこで各要因の単純主効果を分析した結果，ビデオ１の場合のみLSD法による多重比較の結果，適応指導教室通級群（n=7）は中２，中３の２群よりも明らかにビデオの登場人物に対して好意を抱いていた（$Mse=79.81$, $p<.05$）。通常学級の中学生はビデオ１の登場人物に対して好意的感情を示していない。つまり，優等生だった男子（現在22歳）が部活動の野球でつまずいて不登校になっていったビデオ１では好意度得点が低く，いじめが原因で身体反応が現れ，不登校になっていったビデオ２の男子に対しては好意度得点が高く，共感的態度が見られたと考えられる。

考　察

不登校への共感的態度を生じさせる要因として「類似性」を認知することを挙げ，不登校生に対して自分との類似性を認知する者はそうでない者よりも不登校生徒への好意度が高く，共感的態度も強いのではないかと仮説した。この仮説は図３，図４，図５，図６に示すように，実証されたと言える。ただ効果量は小さく，更なる検討が必要である。特にビデオの内容により，好意度得点も変化している（図８）。つまりいじめによる不登校（ビデオ２）は共感的態度を生じやすく，好意度得点も高得点である。しかし，優等生が部活動でつまずいて不登校になっていったビデオ１では共感的態度を生じにくく，好意度認知得点も低くかった。いじめ問題は中

学校の現場でかなり一般的で，その時の苦痛を体験している生徒の割合も多いからと推測される。Wetzel & Insko (1982) は，類似性認知は問題の重要性と結びついており，重要な問題ほど類似性が求められるとしている。いじめ問題は多くの中学生にとって重要であるため，共感的態度も生じやすかったが，優等生の不登校問題はそれほど一般的ではなく，重要性も認知されにくかったと考えられる。

撫尾・加藤 (2011) は中学生の不登校傾向を調査しているが，「朝起きたとき，今日は学校に行きたくないと思ったことがある」生徒は19%と報告している。また，不登校傾向の高い生徒は不登校に対して同情的態度を示し，批判的態度が弱かった。これも類似性認知が介在していることが推測できる。

今後は不登校を支援する教師に焦点を当て，類似性認知と支援との関連性を検討する必要がある (山本, 2007; 2010)。

引用文献

Byrne, D. 1971 *The attraction paradigm. Academic Press.*

日高なぎさ　2003　健常者を対象とした不登校の研究―不登校にならなかった要因について―　関西大学心理相談室紀要 4, 75-82.

本間友巳　2000　中学生の登校を巡る意識の変化と欠席や欠席願望を抑制する要因の分析　教育心理学研究, 48, 32-41.

五十嵐哲也　2011　小中学生の一年間にわたる不登校傾向の変化とソーシャルサポートとの関連　愛知教育大学教育創造開発機構紀要, 1, 21-28.

門田幸太郎・平本毅　2004　対人認知における非類似性について　立命館産業社会論集,40 (3), 21-36.

小林正幸・下村　麦　2001　不登校経験者の自己概念の変容に関する研究　東京学芸大学紀要１部門, 52, 287-299.

丸山達也・竹田眞理子　2011　不登校児への支援経験の程度が実際の支援に及ぼす影響 : 不登校の原因イメージを関連させて　和歌山大学教育学部紀要. 教育科学 61, 107-117.

中村雅彦　1984　性格の類似性が対人魅力に及ぼす効果　実験社会心理学研究, 23, 139-145.

中里浩明・井上徹・田中国夫　1975　人格類似性と対人魅力－向性と欲求の次元　心理学研究, 46, 109-117.

Palmer, J. & Byrne, D. 1970 Attraction toward dominant and submissive strangers: Similarity versus complementarity. Journal of Experimental Research in Personality, 4, 108-115.

櫻井裕子　中学生が考える「学校」と「不登校に対するイメージ」について, 奈良女子大学社会学論集, 18, 181-196.

Stalling, R.S. 1970 Personality similarity and evaluative meaning as conditioners of attraction. Journal of Personality and Social Psychology, 14, 77-82.

白井利明　1992　登校拒否に対する青年・大人・教師の認知の違い　教育心理学研究, 40, 1-9.

Wetzel, C.G. & Insko, C.A. 1982 The similarity-attraction relationship: Is there an ideal one? Journal of Experimental Social Psychology, 18, 253-276.

山本　奬　2007　不登校状態に有効な教師による支援方法　教育心理学研究, 55, 60-71.

山本　奬　2010　不登校対応教師効力感に関する基礎的研究　岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, 9, 163-174.